

アニメーションを根幹としたTV共存策 ——東映の傍流映画製作（1980-2000）を振り返って

楊 紅 雲

はじめに

東映は1951年に設立して以来、自社の映画製作に頼って邦画界を支え続けてきた。その半世紀の軌跡（付録）を映画産業の立場において振り返ってみると、それはまさしくテレビ対策を重視した映画経営の歴史である。

1953年のテレビ初放送は、映画が映像娯楽業界を君臨する時代の終焉を告げた。当時、他社がまだ映画に頼っていた時代のテレビを軽視、無視する中、東映の経営者はテレビの登場とほぼ同時に、映画とテレビとの一元的経営を考案し、すばやく実施に取り組んでいた。意欲的に子供向けの娯楽版映画を製作する一方、日本一の動画スタジオである東映動画株式会社を設立し、映画会社としてテレビ事業に参入、それが後に日本教育テレビの開局へとつながった。また、CMの製作やテレビ放映用作品を製作してテレビ局に提供するなど、他社に先駆けてさまざまなTV提携策を実行した。

1960年代に入ってから、テレビ産業の急成長によって、テレビ放映を利用するばかりでは逆にテレビに観客を奪われていくことになった。そこで東映はそれまでのTV提携策とは正反対に、テレビに出来ない内容をスクリーンに映し出すというTV対抗策を考案した。これが即ち任侠映画路線の始まりであった。任侠映画の製作によって、東映は「絶対にテレビでは出来ない素材で行こうという方針を早く決めたわけよ」という中島貞夫監督の言葉を検証するように、吉田貞次（敬称を省略する、以下すべて同じ）もインタビューに同様の見解を述べた。「やくざ映画、これはまあ、テ

レビ対策ですけどね、やくざ映画というのは。要するに、アウトローの世界はテレビで出来ないわけでしょう。それはまさしく岡田の経営方針が当たっていると思うんですよ²。このように、東映は岡田茂が主張する「不良性感度」映画によって、テレビと観客層を分け合うことができ、自社の映画館を護ったのである。なお、1973年からは更なる刺激が追求され、任侠映画より遥かに生々しい実録映画が登場した。この種の映画は実質的に任侠映画と同じく、テレビに出来ない道を通ったのである。

そして、1980年代は多メディアが共存する時代に入り、主流映画製作が路線化しにくくなる中、アニメーションを中心とした傍流映画製作が替わって会社経営の支えとなった。これが即ちアニメーションを根幹としたTV共存策である。本論文は、東映が1980年代、90年代にかけて講じてきたこのTV共存策の必然性、本質、意義などについて考察するものである。

1. TV対抗策の維持困難

1.1. 実録映画の人気ダウン

1980年代、日本が世界でもっとも金持ちの国であることは自明の常識になった。豊かになった日本人はますます映画を見なくなり、海外旅行、ゴルフなど、映画より贅沢な娯楽がいくらかでもあった。東映では、『日本の首領』（1977中島貞夫）の1本立て興行を境目に、プログラムピクチャー2本立て興行の時代が終わった。それまで、東映は劇場映画を年間50本余り製作、配給していたが、その翌年の1978年は26本と半数までに減っていた。これは大作を長期間興行するシステムに転換したからである。即ち、製作をもっとも大事にしてきた東映にとっては、“現場”が大幅に減少することを意味している。その後の東映は、撮影現場の繁盛ぶりもなければ、会社全体も元気を失っていった。

また、題材の問題も深刻であった。それまでの実録映画は任侠映画の伝統を受け継ぎ、やくざの世界を素材にしていたため、企画側は取材の困難に悩まされた。その実態を日下部五朗プロデューサーは次のように語っ

た。

実録というのはノンフィクションでしょう。取材するのがとても大変なんですよ。そういう映画になるようなドラマがありませんんですよ。取材するのもたいへんですし、日本では裏社会じゃないですか、怖いじゃないですか。すると、そういう人たちをヒーローにすれば、すごくいろんないちゃもんがあるんですよ。要するにわれわれ普通の社会から抵抗があるんです。もう最後の方は新聞記事なんかを頼っていたんですよ。新聞記者が取材して書いたものを、われわれは素材にして映画を作りましたが、現実にわれわれが行って取材してきたわけじゃないから、本当はリアルな話しにならない。そういうことでめになってきたんですよ。³

言い換えれば、実録映画はやくざの実生活という裏社会のことをリアルに映像化するわけで、東映が一貫して得意とした男性向けの映画路線を袋小路へと導いてしまった。取材ができなくなったため、仕上げた作品もリアルなものにならない。まさに有名無実であり、長続きもできなかったのである。

1.2. 「善良性感度」映画への復帰—ジャンルの多様化

実録映画の人気ダウンが原因で、東映映画製作は大きく変貌した。製作本数の減少と作品ジャンルの多様化が余儀なくされたばかりでなく、実際、プログラムピクチャー時代の“任侠もの”、“実録もの”と言った主流映画に夥しい「不良性感度」、「異常性感度」映画が添えられるような製作体制はすでに崩れ、題材のどれもがシリーズ化不能となったため、東映は創立当初の明るく楽しい「善良性感度」映画へと復帰する傾向にあった。その結果、実録映画に代わる路線こそ容易に見出せなかったものの、映画史に残るような文芸大作は次々と製作され、国内外で頻繁に受賞するよう

になった。ジャンルの的には、女性客向けのシリーズ作品のほかに、子供向けアニメーション、若い客層向けの現代アクションなども大幅に増加した(図表1)。

図表1 1980年代の東映配給作品ジャンル分類一覧

年度		1980	1981	1982	1983	1984	1985	1986	1987	1988	1989
配給本数		25	29	20	20	20	23	19	25	21	20
ジャンル	女性映画	/	1	3	4	3	4	3	5	3	4
	軍事映画	2	/	1	1	/	/	/	/	/	/
	アニメ	11	8	5	5	9	13	7	10	8	8
	やくざ映画	5	4	1	1	1	1	3	1	1	1
	アクション	6	14	9	7	5	4	3	9	8	6
	文芸映画	1	2	1	2	2	1	3	/	1	1

(注：表中データは太秦映画村資料室提供資料による)

さらには“エロ・グロ”ものとされる作品は殆んど作られなくなり、かつてのエロティシズム映画は女性映画、アクション映画とアニメに替えられていた。図表1の通り、従来の男性路線に反して、女性を主人公にし、女性の人生を描く作品が年々増えていった。この女性映画ジャンルの開発は東映が従来の伝統的な男性路線から脱出しようという努力の結果であり、女性観客層の獲得に役に立った。一方やくざ映画は徐々に減り、次第に消滅していった。また、1980年代当初の日本映画界では軍事映画が一時的に流行っていたため、東映もこの時流に乗り、『動乱』（1980 森谷司郎）、『二百三高地』（1980 舛田利雄）、『大日本帝国』（1982 舛田利雄）、『日本海大海戦 海ゆかば』（1983 舛田利雄）などの軍事大作を製作した。ここで特筆すべきなのは文芸大作の製作である。“客の入る映画”、“大衆娯楽映画”を映画経営の基本方針として強調し続けた東映もいくつか文芸大作を製作し、作品が出るたびに大きな反響を呼んでいた。『人生劇場』（1983 深作欣

二、佐藤純弥、中島貞夫)、『檀山節考』(1983 今村昌平)、『空海』(1984 佐藤純弥) などはそのよい例である。

1.3. 女性映画路線の失敗

上述のように、男性路線の映画を一筋製作し続けてきた東映は、1980年代初期から女性映画路線の開発に力を入れた。例えば、日下部五朗が1982年にプロデュースした『鬼龍院花子の生涯』(1982 五社英雄)は、大正から昭和にかけての土佐を舞台に、侠客鬼龍院政五郎と彼を取り巻く女たちの凄まじい愛憎劇を描き、鮮烈なエロティシズムとダイナミックな映像美で、女性ファンを中心に大ヒットし、東映女性映画路線の原点とされる作品でもあった。その翌年に同じく俳優座映画放送との提携によって、同スタイルの作品『陽暉楼』(1983 五社英雄)が完成された。

それに続き、女性映画の大監督、五社英雄が大活躍するようになり、しばしば宮尾登美子の原作を映画化して、公開する度に大ヒットした。この種の作品は、しばらくは東映の新しいドル箱となり、撮影所も活気を取り戻した。当時、これらの作品を企画していた日下部は、「従来の東映固有の観客だけでなく、やくざ映画に興味があっても恐くて映画館に入ってこれないという女性観客を意識していたわたしは、この流れを手がかりに、『極道の妻たち』(1986 五社英雄)など所謂「女」路線を開発、定着させることになる」⁴と語ったことがある。1980年代に配給した女性映画作品は図表2の通りである。

しかしこれらの作品は、いずれも題材的にはやくざの世界、やくざの女という従来の狭いカテゴリから脱出できなかった。それゆえ、この種の女性映画は最終的にいくつか単発のヒット作品に留まり、大きく路線化することはなかったのである。とはいえ、東映は1990年代においてもずっとこの流れのものに未練があった。宮尾登美子の原作で撮った『寒椿』(1992 降旗康男)、『藏』(1995 降旗康男)はその証である。

図表2 東映女性映画路線作品一覧（1980-1989）

（封切時間順）

封切年月	作品名	監督
1981/1	青春の門	蔵原惟繕・深作欣二
/8	野菊の墓	澤井信一郎
1982/1	青春の門	蔵原惟繕
/6	鬼龍院花子の生涯	五社英雄
1983/9	陽暉楼	五社英雄
1984/1	『序の舞』	中島貞夫
/6	天国の駅	出目昌伸
/9	北の螢	五社英雄
1985/1	權	五社英雄
/6	夢千代日記	浦山桐郎
/9	ひとひらの雪	根岸吉太郎
/10	花いちもんめ	伊藤俊也
1986/1	玄海つれづれ節	出目昌伸
/2	童貞物語	小平裕
/9	疵（きず）	梶間俊一
/10	華の乱	深作欣二
/12	恋子の毎日	和泉聖治
1987/1	『夜汽車』	山下耕作
/6	吉原炎上	五社英雄
1988/1	花園の迷宮	伊藤俊也
/4	肉体の門	五社英雄
1989/2	螢	梶間俊一
/5	桜の樹の下で	鷹森立一
/12	公園通りの猫たち	中田新一

2. TV共存策—アニメーションを根幹に

2.1. 主流映画路線化の困難

佐藤忠男が記述したように、「1980年代に生じた日本映画の変化の最大のことは、従来プログラムピクチャーと呼ばれていた定型的なB級の大衆映画の量産体制が崩れてしまったことであろう。かつて日本映画は、それらの量産によって計画的スターを育て、またそれで育ったスターたちの人気のあり方に合わせてそれぞれに一定の役柄を作り、スターたちの役柄がより魅力的に生きるようにという目的のもとに技術を結集して映画を作ってきた。観客はスターの顔ぶれでその作品が自分の好みのタイプのものかどうかを容易に見分けて安心して映画館に行けた。少数の芸術映画と呼ばれるものも、スターが出演していることで興行価値を見込め、スターに対するファンの期待を考えれば、そのスターがプログラムピクチャーで演じている役柄とあまりかけ離れたことをやらせるわけにはゆかず、そこに自ら、芸術性と大衆性の調和が保たれた。スターの育成とその人気の保持ということを核にしてそれらの総体的なプランをたてて推進したのが大手の映画会社であり、撮影所のシステムだった……このシステムが観客の減少にともなって1970年代から崩壊しはじめ、1980年代には殆んど失われた」⁵。東映においても、撮影所システムの崩壊によって、スターシステムの崩壊と経営の混迷を招いた。かつてのスターたちがいなくなり、新人スターも育たなくなったばかりでなく、旧来のシステムに馴染んでいたベテラン監督や有力なスタッフもまた次々と会社を離れていった。スターの不在とベテラン監督の欠如が原因で、定型的なヒーローやヒロイン像が作れなくなった会社は、さまざまな試行錯誤を余儀なくされ、1980年代の十年間をそれに費やした。

なお、東映は1990年代においても、引き続き文芸作品、アクション、女性映画、アニメ、青春ドラマなどのジャンル（図表3）に絞りながら、いくつかの国際合作映画も製作した。但し、このような試みはそれぞれが成功点もあつたにもかかわらず、安定した観客層を掴むことがなかった。

図表3 1990年代の東映配給作品ジャンル分類一覧

年度		1990	1991	1992	1993	1994	1995	1996	1997	1998	1999
配給本数		16	15	19	29	29	28	19	30	27	26
ジャンル	文芸大作	1	3	1	/	/	2	2	3	1	3
	アクション	3	3	4	6	6	7	4	7	5	4
	女性映画	3	2	3	1	2	4	3	1	3	2
	アニメ	6	5	6	13	18	12	7	11	8	9
	青春映画	1	/	2	4	1	3	3	6	8	6
	やくざ映画	2	2	3	5	2	/	/	2	2	2

(注：表中データは太秦映画村資料室提供資料による)

2.2. アニメーションブーム

1960年代初期から、時代劇映画の退潮に伴い、東映が得意とした「お子様映画」も人気ダウンとなった。子供観客層を奪還するために、東映は1964年7月から「東映まんが大行進」と称して、子供向け映画を数本まとめて上映するという対策を実行した。その後、「東映こどもまつり」、「東映まんがパレード」、「東映ちびっ子まつり」と名称変更し、1969年3月以降は「東映まんがまつり」となった。当時の予告CMなどで「東映～まんがまつり～」という子供の掛け声は人々に馴染のものとなっていた。

1970年代後半から、テレビ産業の好調に伴い、東映は珍しいアニメを製作し、テレビアニメの隆盛期を迎えるようになった。当時の「マジンガーZ」にはじまる巨大ロボット物や、一連のテレビSFアニメは空前のアニメブームを巻き起こした。

そしてその勢いは1980年代に入ってから続いた。映画界全体が低迷する中、年に2度の東映まんが祭りは人気の一途を辿った。この時期の特徴としては、かつて劇映画と相まってヒットした名作長編動画がまんが祭りのプログラムから消えたことである。

また、1980年代初期のテレビアニメ「Dr. スランプアラレちゃん」シリーズは、新しい感覚と、古い人情の両方が感じられるところで人気を得、更なるヒットを続けた。「以後、東映動画からは『少年ジャンプ』生まれのヒット作が続々と登場することになった。マンガとアニメ、そしてキャラクター商品のメディアミックスは、ますます盛んになってきている」⁶という東映の記述も残っている。

2.3. アニメーション作品群の実態

主流映画が低迷する中、東映はその映画経営をアニメーションに重点を置いた。日本国内において、1970年代後半からすでに上昇ぶりを見せたアニメーションブームは、東映の経営陣に新たな可能性を示したからである。1980年代における東映配給の邦画本数（図表1）によれば、アニメーションはほとんど3分の1、或は2分の1を占めている。さらに、1990年代になっても、その繁盛ぶりが衰えることはなかった（図表3）。また、1990年代の東映動画はコンピューター化が導入され、手作業に頼っていた動画の製作作業もコンピューターによって製作できるようになった。ハード面の技術革新がアニメの人気を支える鍵となった。

圧倒的なヒット作品に『仮面ライダー』、『銀河鉄道999』、『白雪姫』、『ゲゲゲの鬼太郎』、『白鳥の湖』、『一休さん 春だ！やんちゃ姫』、『少年ケニヤ』、『キン肉マン』、『宇宙刑事 シャイダー』、『キャプテン翼 危うし！全日本Jr.』、『グリム童話 金の鳥』、『聖闘士星矢』、『おそ松くん』、『ひみつのアッコちゃん』、『悪魔くん』、『DRAGON BALL Z』、及び『ドラゴンボールZ』、『美少女戦士セーラームーン』などのシリーズ作品があった。これらの作品を含む夥しい東映アニメーションは実録映画路線以後の東映TV共存策の中心となる作品群（図表4）を構成していた。

図表4 東映配給アニメーション作品一覧（1980-2000）（封切時間順）

封切年月	作品名	監督
1980/3	森は生きている	矢吹公郎
/3	仮面ライダー 8人ライダー VS 銀河王	石森章太郎
/3	ゼンダマン	大貫信夫
/3	銀河鉄道999 ガラスのクリア	井内秀治
/3	花の子ルンルン	遠藤勇二
/7	白雪姫	デイヴィット・ハンド
/7	電子戦隊 デンジマン	竹本弘一
/7	魔法少女ララベル	福島和美
/7	ゲゲゲの鬼太郎	笠井由勝
/12	サイボーグ009 超銀河伝説	明比正行
/12	'80アニメーションザ・ベストテン	ドン・上野
1981/3	世界名作童話 白鳥の湖	矢吹公郎
/3	一休さん 春だ！やんちゃ姫	生頼昭憲
/3	おたすけマン	笹川ひろし
/3	仮面ライダースーパー1	山田稔
/7	101匹わんちゃん大行進	W・G・ライザーマン
/7	ミッキーマウスとドナルドダック	岡崎稔
/7	太陽戦隊 サンバルカン	東条昭平
/7	Dr. スランプアラレちゃん ハロー！不思議島の巻	岡崎稔
1982/3	世界名作童話 アラジンと魔法のランプ	笠井由勝
/3	大戦隊ゴグルファイブ	東条昭平
/3	まんが日本昔ばなし	高沢孫一
/3	あさりちゃん	福島和美
/7	Dr. スランプ ほよよ！宇宙大冒険（スペースアドベンチャー）	永丘昭典
1983/3	まんがイソップ物語	彦根紀夫
/3	Dr. スランプアラレちゃん ほよよ世界一周大レース	岡崎稔
/3	科学戦隊 ダイナマン	東条昭平

/3	バッテンロボ丸	加藤盟
/7	バタリロ！ スターダスト計画	西沢信孝
1984/3	少年ケニヤ	大林宣彦
/3	日本語版 スヌーピーとチャーリー・ブラウン	メレンデス
/7	超電子 バイオマン	堀長文
/7	キン肉マン	白土武
/7	宇宙刑事 シャイダー	田中秀夫
/7	THE かぼちゃワイン	矢吹公郎
/12	キン肉マン 大暴れ！ 正義超人	白土武
/12	Dr. スランブアラレちゃん ナナバ城の秘宝	芝田浩樹
/12	宇宙刑事シャイダー 追跡！ しぎしぎ誘拐団	田中秀夫
1985/3	キン肉マン 正義超人 VS 古代超人	山吉康夫
/3	GU - GU ガンモ	永丘昭典
/3	電撃戦隊 チェンジマン	堀長文
/3	とんがり帽子のメモル	佐藤順一
/7	キン肉マン 逆襲！ 宇宙かくれ超人	山吉康夫
/7	キャプテン翼 ヨーロッパ大決戦	森下成一
/7	Dr. スランブアラレちゃん ほよよ！ 夢の都メカボリス	坂西勝
/7	電撃戦隊 チェンジマン2	堀長文
/12	キャプテン翼 危うし！ 全日本 Jr.	矢沢則夫
/12	キン肉マン 晴れ姿！ 正義超人	川田武範
/12	ゲゲゲの鬼太郎	白土武
1986/3	キャプテン翼 明日に向かって走れ！	平野義和
/3	キン肉マン ニューヨーク危機一髪！	川田武範
/3	ゲゲゲの鬼太郎 妖怪大戦争	小林義明
/3	超新星 フラッシュマン	堀長文
/7	ハイスクール！ 奇面組	福富博
/7	ゲゲゲの鬼太郎 最強妖怪軍団！ 日本上陸！！	今田智憲
/7	キャプテン翼 世界大決戦!! Jr. ワールドカップ	岡迫亘弘
/7	メイプルタウン物語	小松原一男

/12	DRAGON BALL	西尾大介
/12	ゲゲゲの鬼太郎 激突！異次元妖怪の大反乱	芝田浩樹
/12	キン肉マン 正義超人 VS 戦士超人	山吉康夫
1987/3	グリム童話 金の鳥	平田敏夫
/3	新メイプルタウン物語 パームタウン編	青山充
/3	超新星フラッシュマン 大逆転！タイタンボーイ！！	山田稔
/7	DRAGON BALL 魔神城のねむり姫	西尾大介
/7	光戦隊 マスクマン	長石多可男
/7	超人機 メタルダー	小笠原猛
/7	聖闘士星矢	森下孝三
1988/3	仮面ライダー BLACK	小西通雄
/3	ビックリマン	青山充など
/3	レディレディ！！	越智一裕
/3	聖闘士星矢 神々の熱き戦い	山内重保
/7	ビックリマン 無縁ゾーンの秘宝	青山充など
/7	DRAGON BALL 摩訶不思議大冒険	竹之内和久
/7	闘将（たたかえ）！！拉麺男（ラーメンマン）	山吉康夫
/7	仮面ライダーBLACK 恐怖！悪魔峠の怪人館	小笠原猛
1989/3	聖闘士星矢 最終聖戦の戦士たち	明比正行
/3	ひみつのアッコちゃん	芝田浩樹
/3	高速戦隊 ターボレンジャー	長石多可男
/3	おそ松くん	鴨野彰
/7	悪魔くん	佐藤順一
/7	DRAGON BALL Z	西尾大介
/7	ひみつのアッコちゃん海だ！おばけだ！！夏祭り	久岡敬史
/7	起動刑事 ジバン	小西通雄
1990/3	DRAGON BALL Z この世で一番強いヤツ	西尾大介
/3	悪魔くん ようこそ悪魔ランドへ！！	佐藤順一
/3	魔法使いサリー	葛西治
/7	DRAGON BALL Z 地球まるごと超決戦 悟空が行く！	西尾大介

77	PINK ピンクがウインク！	芦田豊雄
77	剣之介さま 剣之介が走る！	岡崎稔
1991/3	DRAGON BALL Z 超サイヤ人だ孫悟空	橋本光夫
73	まじかる★タルるートくん	山内重保
77	DRAGON BALL Z とびっきりの最強対最強	橋本光夫
77	まじかる★タルるートくん 燃えろ！友情の魔法大戦	角銅博之
77	DRAGON QUEST ダイの大冒険	竹之内和久
1992/3	92 春東映アニメフェア ドラゴンボールZ 激突！100億パワーの戦士たち	西尾大介
73	92 春東映アニメフェア ドラゴンクエスト ダイの大冒険 起ちあがれ！！アバンの使徒	芝田浩樹
73	92 春東映アニメフェア まじかるタルるートくん すき・すき・タコ焼き	貝澤幸男
77	92 夏東映アニメフェア ドラゴンボールZ 極限バトル！！三大超サイヤ人	菊地一仁
77	92 夏東映アニメフェア ドラゴンクエスト ダイの大冒険 ぶちやぶれ！！新生6大將軍	西沢信孝
77	92 夏東映アニメフェア ろくでなしBLUES	吉沢孝男
1993/3	93 春東映アニメフェア ドラゴンボールZ 燃えつきろ！！熱戦・烈戦・超激戦	山内重保
73	93 春東映アニメフェア Dr. スランプアラレちゃんちゃ！ペンギン村はハレのち晴れ	貝澤幸男
74	93 東映スーパーヒーローフェア 五星戦隊ダイレンジャー	東條昭平
74	93 東映スーパーヒーローフェア 特捜ロボ・ジャンパーソン	小西通雄
74	93 東映スーパーヒーローフェア 仮面ライダーZO	雨宮慶太
77	93 夏東映アニメフェア ドラゴンボールZ 銀河ギリギリ！！ぶっちぎりの凄い奴	上田芳裕
77	93 夏東映アニメフェア Dr.スランプアラレちゃんちゃ！ ペンギン村より愛をこめて	橋本光夫
712	94 正月セーラーームーンフェア 美少女戦士 セーラーームーンR	幾原邦彦

/12	94 正月セーラームーンフェア ツヨシしっかりしなさい	三沢伸
/12	94 正月セーラームーンフェア メイクアップセーラー戦士	小坂春女
1994/3	94 春東映アニメフェア ドラゴンボールZ 危険なふたり！超戦士はねむれない	山内重保
/3	94 春東映アニメフェア スラムダンク	西沢信孝
/3	94 春東映アニメフェア Dr. スランプアラレちゃん ほよよ！ 助けたサメにつれられて……	橋本光夫
/4	94 東映スーパーヒーローフェア 仮面ライダーJ	雨宮慶太
/4	94 東映スーパーヒーローフェア 忍者戦隊カクレンジャー	東篠昭平
/4	94 東映スーパーヒーローフェア ブルースワット	辻理
/7	94 夏東映アニメフェア ドラゴンボールZ 超戦士撃破！！勝つのはオレだ	上田芳裕
/7	94 夏東映アニメフェア スラムダンク 全国制覇！桜木花道	有迫俊彦
/7	94 夏東映アニメフェア Dr. スランプアラレちゃん んちゃ！わくわくハート	橋本光夫
/8	東映アニメスペシャル GS 美神 極楽大作戦	梅澤淳稔
/8	東映アニメスペシャル 平成イヌ物語バウ	加賀剛
/8	東映アニメスペシャル らんま 1,2 超無差別決戦！ 乱馬チーム VS 伝説の鳳凰	西村純二
/12	95 正月セーラームーンフェア 美少女戦士セーラームーンS	芝田浩樹
/12	95 正月セーラームーンフェア 蒼き伝説シュート！	西尾大介
/12	95 正月セーラームーンフェア おさわが！スーパーベビー	佐藤順一
1995/3	95 春東映アニメフェア ドラゴンボールZ 復活のフェーゾン！！悟空とベジータ	山内重保
/3	95 春東映アニメフェア スラムダンク 北最大の危機！燃えろ桜木花道	角銅博之
/3	95 春東映アニメフェア ママレードボーイ	矢部秋則
/4	超力戦隊オーレンジャー	小林義明
/4	人造人間ハカイダー	雨宮慶太
/4	重甲ビーファイター	金田治

77	ドラゴンボールZ 龍拳爆発!! 悟空がやらねば誰がやる	橋本光夫
77	スラムダンク 吠えろバスケットマン魂!! 花道と流川の熱き夏	明比正行
77	スレイヤーズ, はじまりの冒険者たち	渡辺ひろし
112	美少女戦士セーラームーンSS	芝田浩樹
112	美少女戦士セーラームーンS外伝 亜美ちゃんの初恋	五十嵐卓哉
112	あずきちゃん	小島正幸
1996/3	ドラゴンボール最強への道	山内重保
73	96春東映アニメフェア ご近所物語	志水淳児
77	ゲゲゲの鬼太郎 大海獣	勝間田具治
77	地獄先生ぬ〜べ〜	横山健次
78	X-エックス-	りんたろう
78	スレイヤーズ RETURN	渡辺ひろし
112	金田一少年の事件簿	西尾大介
1997/3	97春東映アニメフェア 地獄先生ぬ〜べ〜午前0時ぬ〜べ〜死す!	貝澤幸男
73	97春東映アニメフェア ゲゲゲの鬼太郎 おばけナイター	佐藤順一
73	97春東映アニメフェア 花より男子	山内重保
73	新世紀エヴァンゲリオン劇場版 シト新生	摩砂雪
74	ヘルメス 愛は風の如く	今沢哲男
77	97夏東映アニメフェア キューティーハニーF	佐々木憲世
77	97夏東映アニメフェア ゲゲゲの鬼太郎 妖怪特急 まぼろしの汽車	吉沢孝男
77	97夏東映アニメフェア 地獄先生ぬ〜べ〜 恐怖の夏休み! 妖しの海の伝説!	志水淳児
77	たまごっち ホントのはなし	岸野幸正
77	新世紀エヴァンゲリオン Air, まごころを君に THE END OF EVANGELION	庵野秀明
78	スレイヤーズぐれえと	渡辺ひろし
1998/3	銀河鉄道999 エターナルファンタジー	宇田鋼之介

/3	長靴をはいた猫	森康二
/4	MAZE☆爆熱時空 天変脅威の巨人 ようこそロードス島へ	鈴木行
/8	スレイヤーズごうじゃす	渡辺博
/8	劇場版機動戦艦ナデシコ ザ・プリンセス・オブ・ダークネス	佐藤竜雄
/12	映画版ビーストウォーズ スペシャル 超生命体トランスフォーマー CG版ビーストウォーズ 激突！ビースト戦士	岩浪美和
/12	映画版ビーストウォーズ スペシャル 超生命体トランスフォーマー CG版ビーストウォーズメタルス	岩浪美和
/12	映画版ビーストウォーズ スペシャル 超生命体トランスフォーマー ビーストウォーズII ライオコンボ危機一髪	西森章
1999/3	99春東映アニメフェア ドクターズランプアラレのビックリバーン	山内重保
/3	99春東映アニメフェア 遊☆戯☆王	志水淳児
/3	99春東映アニメフェア デジモンアドベンチャー	細田守
/7	99夏アニメフェア ビーストウォーズメタルス 超生命体トランスフォーマー	子安武人
/7	99夏アニメフェア スーパードールリカちゃん	櫻井智
/7	99夏アニメフェア 小さな巨人マイクロマン 大激突！マイクロマンVS最強戦士ゴルゴン	伊藤健太郎
/8	劇場版 少女革命ウテナ アドゥレセンス黙示録	幾原邦彦
/8	劇場版アキハバラ電脳組 2011年の夏休み	桜井弘明
/8	金田一少年の事件簿2 殺戮のディープブルー	西尾大介
2000/3	2000春東映アニメフェア ONE PIECE ワンピース	志水淳児
/3	2000春アニメフェア デジモンアドベンチャー ほくらのウォーゲーム！	細田守
/7	2000夏東映アニメフェア デジモンアドベンチャー02 前編 デジモンハリケーン上陸！！後編 超絶進	山内重保

17	2000夏東映アニメフェア おジャ魔女どれみ#	五十嵐卓哉
17	2000夏の角川まんが大行進 おじゃる丸 約束の夏 おじゃるとせみら	大地丙太郎
17	2000夏の角川まんが大行進 フシギのたたりちゃん	岩沢清
17	2000夏の角川まんが大行進 モンコレナイト 伝説のファイアドラゴン	青木康直

3.TV 共存策における東映の生き方

3.1. TV 共存策の本質

プログラムピクチャーの崩壊は、映画製作の路線化を系統的に不可能にした。これによって、作品ごとの成功が重要視されるようになり、企画が難しくなっていた。ヒット作品がずっと続けられる理想的な映画作りを実現させるために、即ち持続性のある企画への願望から、東映はアニメーション番組に趣向を凝らして、子供観客層を維持し続けようとした。これはかつての“お子様映画”とは違って、子供客層を映画館へ惹きつけるだけではなく、多メディアが共存する中、ソフト権利のビジネスを含む映像事業の多角経営を狙ったものであろう。

日本において、1980年代後半に入ると、レンタル・ビデオが盛んになり、ビデオで映画を鑑賞する人数が急増した。一方、ビデオカメラと周辺機器の軽量・簡便化に伴い、フィルムとビデオ共存の時代が到来した。テレビ、ビデオ、DVDと映像メディアが多角化していく中、映画は従来のプライドを取り戻すことはほとんど不可能になっていたように見える。しかし、それは映像作品を、何を通じて、何処の場所で、どのように見ていくのかというだけの多様化であり、興行の問題である。映像作品の製作という意味において、従来の映画の原理はおそらく全ての映像作品にとって最も重要な根拠となることは間違いないだろう。興行を営むだけでは映像事業のためならず、製作することこそ映像文化の将来を握る鍵である。作品を製作し、そのソフト権利さえ所有していれば、興行形式に変化があったとし

でも対応していけるはず。アニメーション製作はまさにこの経営方策の具現であり、テレビ、ビデオ、DVDと供給関係を築き、共存していくための成功例である。

要するに、かつてのTV提携策はテレビを利用し、観客の足を映画館へ運ばせた。それに次ぐTV対抗策はテレビが掴むことの出来ない観客を映画館へ来させ、異なる映像の世界を生み出すことによって、テレビと観客層を分け合っていた。そして、1980年代、90年代のTV共存策は逆に映画館という空間に拘ることなく、あらゆる可能な空間での映像鑑賞に対応し、テレビと観客層を共有することを狙った。

3.2. 東映の生き方

テレビ放送が日本で始まって以来、東映はテレビを重視すべく、映画との一元的経営を唱え続けていた。故に、その映画経営は常にテレビに対応した方針で貫いた。1950年代はテレビとの提携策を採ることによって、テレビの助けになったばかりでなく、時代劇を中心とした自社映画製作の主流路線を築くことも出来たのである。1960年代になると、東映はその映画経営をテレビに対抗する方針へと進めていった。即ちその主流映画を時代劇からやくざ任侠映画へと転換していったのである、その傍流にエロティシズム映画を加え、いわゆるエロ・グロ映画の製作によって、テレビの盲点をつき、テレビと観客層を分け合うことに成功した。そして、1970年代はこの方針を更に推し進め、やくざ実録映画へと突入した。この実録映画路線によって、東映のテレビ対抗策は更に10年ほど続けられ、他社が経営不調、倒産する中、東映を生き抜く道へと導いた。

しかし1980年代になってから、観客は約20年間も続いていた東映やくざ映画にそれほど関心を持たなくなり、東映はテレビとの共存策を考えざるを得なくなった。そこで、東映はその主流映画を「不良性感度」から「善良性感度」へと戻らせ、さまざまなジャンル開拓に力を入れた。中でも文芸大作、女性映画、青春もの、アクション、軍事映画などの領域におい

て、有意義な試みが行われていた。ところが、時代が変わり、かつてのようにどれか一つのジャンルを大きな製作路線へと推し進めることは不可能となった。しかし、東映は日本一の動画スタジオを持っていた。路線化しにくい、自社の特徴が出しにくい時代になったからこそ、東映はアニメーションの世界を繰り広げて、他社にない強みで勝負をかけることにした。

こうして、東映のTV共存策は実際にアニメーションを根幹とすることになったのである。そのため、東映は主流映画の当たり外れと関係なく、毎年の春、夏、冬には必ずアニメーション祭りで盛り上がっていた。東映はこのように常にTV対応を念頭に置きながら経営方策を練り続けていた。

終わりに

以前から人気だった「東映～まんがまつり～」は、1970年代において更なるアニメブームを巻き起こし、日本中の子供たちを熱中させた。特に1980年代の主流映画が低迷する中、毎年決まった時期に行われる「東映まんがまつり」だけが不動なものとなった。1990年3月に実写作品がなくなったため「東映アニメまつり」となり、同年7月からは「東映アニメフェア」に名称変更した。実写特撮作品は、「東映スーパーヒーローフェア」として1993年～1995年に劇場公開された。言うまでもなく、このような作品はテレビ放映にも提供され、DVD販売にも出されていた。

このように、東映は30年以上に亘り、日本のアニメ市場を支え続けたのである。特に1980、90年代、東映は主流映画の路線化が難しくなった時期に、アニメーションを主流映画に代わってTV共存策の根幹とした。会社全般の企画や製作を考えた場合、アニメ部門とその周辺は傍流に過ぎない。しかし、会社経営の視点から見ると、アニメの製作によって大いに助かった部分があるのは事実である。これが会社のTV共存策を自然に主流映画からアニメーション製作へとその重点を傾けさせたのである。

今後の東映がどのようにして新たな経営方針を定め、効果的な振興策を

講じていくのかは、かつての経験、アニメーション・コンテンツを中心とするTV共存策の成功例が現在、或いはこれからの多メディアの共存する時代に生きる東映にとって参考になるものと思われる。

付録 テレビに対応した東映映画製作の軌跡（1951-2001）

年代	軌跡（主な出来事・ヒット作品など）	特徴	時期
1951	東映設立	時代劇・お子様映画時代 映画館収入を確保した。	テレビ提携策
52	時代劇の製作		
53	テレビ初放送		
54	TV用CM、フィルムの製作、子供向け「娯楽版」映画スタート		
55	日動映画株式会社を買収		
56	東映動画株式会社設立、テレビ免許申請		
57	東映の申請によって日本教育テレビ設立		
58	日本最初の長編色彩動画『白蛇伝』完成		
59	日本教育テレビ開局、CMと映画を提供		
1960	「特別娯楽版」、第二東映の設立		
61	第二東映の失敗		
62	時代劇人気ダウン		
63	『人生劇場 飛車角』、任侠映画時代到来		
64	『日本侠客伝』、『博徒』、任侠映画路線定着		
65	『網走番外地』、任侠映画の盛隆		
66	『昭和残侠伝 唐獅子牡丹』、『兄弟仁義』		
67	『博奕打ち』、『組織暴力』、『渡世人』		
68	『侠客列伝』、『緋牡丹博徒』、『博徒列伝』		
69	『新網走番外地』、『渡世人列伝』		
1970	『博徒一家』、『博徒仁義』、『遊侠列伝』		
71	『現代やくざ』、任侠映画人気ダウン		
72	『関東緋桜一家』、任侠映画時代終結		
73	『仁義なき戦い』、実録映画時代到来		
74	『仁義なき戦い』、実録映画の盛隆期		
75	『新仁義なき戦い』、『仮面ライガー アマゾン』		
76	『広島仁義』、『実録外伝』、『一休さん』		
77	『日本の首領』、実録映画人気ダウン、『ドカベン』		
78	『柳生一族の陰謀』、『冬の華』、『キャンディ・キャンディ』		
79	『その後の仁義なき戦い』（「仁義」シリーズ終了）		

1980	新路線の模索、『動乱』、『二百三高地』、『銀河鉄道999』	女性映画・文芸大作・アニメ時代	テレビ共存策―夥しいアニメの製作によって、テレビと観客を共有し、映画館収入を確保した。	テレビ共存策
81	角川映画と提携、『青春の門』で女性映画をスタート			
82	『鬼龍院花子の生涯』、『セーラー服と機関銃』			
83	ビデオ事業部発足、『楯山節考』、『まんがイソップ物語』			
84	『空海』、『天国の駅』、『麻雀放浪記』、『キン肉マン』			
85	『權』、『夢千代日記』、『キャプテン翼』、『Dr. スランプ』			
86	『極道の妻たち』、『華の乱』、『ゲゲゲの鬼太郎』			
87	『吉原炎上』、『極道の妻たちⅡ』、『超人機メタルダー』			
88	『肉体の門』、『ビックリマン』、『レディレディ!!!』			
89	『社葬』、『聖闘士星矢』、『ひみつのアッコちゃん』			
1990	『女帝』、『悪魔くん』、『魔法使いサリー』	ヤング映画・アニメの時代	劇場映画を原点に、教育映画、動画、テレビ映画、ビデオ、映像関連事業などへと経営を拡大し、多角経営総合メーカーへとなりつつある。	テレビ共存策
91	『新・極道の妻たち』、『まじかる★タルートくん』			
92	毎年春・夏に開催する「東映アニメフェア」スタート			
93	『ニューヨークUコップ』、『春・夏東映アニメフェア』			
94	『首領を殺った男』、『春・夏東映アニメフェア』			
95	『蔵』、『春・夏東映アニメフェア』			
96	『極道の妻たち 危険な賭け』、『春・夏東映アニメフェア』			
97	『失楽園』、『春・夏東映アニメフェア』			
98	『長靴をはいた猫』、『映画版ビーストウォーズ スペシャル』			
99	『鉄道員 (ぽっぽや)』、『春・夏東映アニメフェア』			
2000	『新・仁義なき戦い』、『春・夏東映アニメフェア』			
01	『極妻』シリーズ終了、『春・夏東映アニメフェア』			

注

- 1 中島貞夫（2002/10/05）筆者によるインタビュー
- 2 吉田貞次（2002/10/24）筆者によるインタビュー
- 3 日下部五朗（2004/05/17）筆者によるインタビュー
- 4 日下部五朗（2001）「わが映画稼業繁盛記」FB編『映画研究誌FB 15号』p.391
- 5 佐藤忠男（1995）『日本映画史』（その3）p.227
- 6 東映株式会社編（1992）『クロニクル東映Ⅰ』p.144

重要参考文献

- 渡邊達人（1991）『私の東映30年』非売品
 大下英治（1990）『映画三国志』徳間書店

ス波司・青山栄（1998）『やくざ映画とその時代』筑摩書房
東映株式会社映像事業部 編（1981）『東映映画三十年』東京東映株式会社
東映株式会社 編（1992）『クロニクル東映』（Ⅰ-Ⅴ）東映株式会社
掛尾良夫 編（1994）『ベスト・オブ・キネマ旬報』キネマ旬報社
FB 編（2001）「FB 第15号」（映画研究誌）行路社
松崎輝夫 編（2002）「映画時報」合同通信社
日本経済新聞社（2002）「私の履歴書」『日本経済新聞』9月1-23日
田中純一郎（1980）『日本映画発達史』（Ⅲ-Ⅴ）中央公論社
佐藤忠男（1995）『日本映画史』（2、3）岩波書店
谷川義雄 編（1993）『年表 映画100年史』風涛社
岡田茂（2001）『悔いなきわが映画人生』財界研究所
俊藤浩滋・山根貞男（1999）『任侠映画伝』講談社
マキノ雅弘（1984）『映画渡世』（天の巻・地の巻）角川文庫
石割平（2000）『日本映画興亡史 マキノ一家』ワイズ出版
四方田犬彦（2000）『日本映画史100年』集英社新書
笠原和夫・荒井晴彦（2003）『昭和の劇 映画脚本家 笠原和夫』太田出版
岡田茂（2004）『波瀾万丈の映画人生 岡田茂自伝』角川書店
大窪徳行・小笠原隆夫 編（1996）『文化と記号—映画・文学から情報まで—』北
樹出版
深作欣二・山根貞男（2003）『映画監督 深作欣二』ワイズ出版

インタビュー資料

中島貞夫（2002/10/05）筆者によるインタビュー（京都・中島貞夫自宅）
吉田貞次（2002/10/24）筆者によるインタビュー（京都・進進堂カフェ）
日下部五朗（2004/05/17）筆者によるインタビュー（京都・日下部事務所）